

## 『としなみ草』巻第十三を読む

～信州の西行伝承とのかかわりを中心として～

中 西 満 義

### はじめに

江戸時代中期の僧侶、歌人であった似雲（延宝元1673－宝暦三1753、八一歳）に家集『としなみ草』がある。似雲三八歳の宝永七(1710)年から、七六歳の寛延元(1748)年までのおよそ四〇年間の詠草約四五〇〇首を収めたもので、全二〇巻からなる。『としなみ草』巻第十二、巻第十三の二巻は「窓の明ほの(上・下)」と題され、和歌紀行文の体裁をなしている。享保十五(1730)年十月十二日に嵯峨の任有亭を出立、伊豆三島、江戸を経て奥州松島に到着、四〇日ほど滞在の後、再び江戸に立ち寄った。奥州随一の歌枕松島に遊ぶこととともに、初春の富士を仰ぐことも目的としていたが、東海道中、

立帰りまたもこゆへきべ命かはよはひふけゆく小夜の中山

など、西行の昔を偲びつつ、予定通り三島の富士見亭に元日を迎えた。

春にあふ身の思出はふしのねやゆきよりしらむ窓の明ほの

は、元日の富士を仰いだ折りの一首で、「窓の明ほの」という紀行文の題はこれによる。

つづく巻第十三は、享保十六(1731)年五月十二日に江戸を立って中山道を二週間程費やして信州松本に到着、竹淵の三井武勝邸を拠点として白糸の御湯への湯浴み、諏訪の御射山祭の見物、そして仲秋の名月を愛でるための姨捨山行など、信州各地の名所を訪ねた。およそ四箇月にわたる滞在期間には求めに応じて歌会にも列しているが、晩秋九月、長く杖を留めた松本竹淵を去り、中山道を西行して帰路についた。巻第十三「窓の明ほの 下」は、木曾路を経て帰洛するまでを綴るが、さらに巻末には年明けの享保十七年二月、近江石山寺に参籠、霊夢を得て西行墳墓の場所を感得して弘川寺に該地を発見する記事で締め括られる。

似雲は、平安時代末期の歌僧西行を慕って諸国を遍歴、嵯峨の任有亭をはじめとして吉野の雪の庵、河内弘川寺の春雨亭、和泉踞尾の幻住軒など、各地に止住の跡を留めた。

僧似雲、始の名は如雲、安芸の国広島の人なり。歌を好み都にのぼりて、儀同三司実陰公に学ぶ。後ゆえありて参らずなりぬるとぞ。名山霊地ここかしこにあそび、住所を定めざれば、世に今西行といへるを聞て、自も、

西行に姿計は似たれども心は雪と墨染の袖  
と戯れける（以下、略）<sup>9)</sup>。

似雲の名は近世後期の伝記書『近世畸人伝』（巻之四）に取り上げられたことで一躍知られるところとなったが、本稿では「今西行」と呼ばれた似雲の信州滞在記とも言うべき『としなみ草』巻第十三を取り上げる。似雲の信州での事蹟については、秋末一郎「歌僧似雲と信濃の旅」<sup>10)</sup>に詳しく紹介されているところであるが、本稿では西行伝承とのかかわりを中心として、『としなみ草』巻第十三を読み直す作業を試みたい。

なお、信州滞在中の姨捨山行を中心とした記事をまとめたものに『更科紀行』がある。三井武勝の編輯になる同書は、矢羽勝幸編著『江戸時代の信濃紀行集<sup>11)</sup>』に掲載をみているが、記事内容にかなりの出入りが認められる。ここでは『更科紀行』との異同にも触れつつ、信州の西行伝承地を巡った「今西行」似雲がどのような記事を書き残しているかを確認してみたい。

## I 洪水の記事

西行伝承地訪問の記事をたどるに先立ち、水害の記述に触れておこう。『としなみ草』巻第十三の歌文は、江戸時代の信州における洪水の様子を記した記録としてもたいへんに貴重である。

五月十二日江戸を出立て、廿五日からうじて信州松本に着、手を折てかぞふれ

ば凡十四五日になりぬ、此間ところどころ洪水にて、山路くづれ川となり、橋  
絶て渡るにたよりなし、そのつらさ筆にも尽しがたくて例のもらしつ、されど  
折々口すさびし腰折いささかひだりにしるす

行なやむひなの長路の五月雨に田子のもすそのうきはものかは

ほしわひぬ旅の衣の一へにもうらみかさなるさみたれの雲

山川やわたせる駒も見えぬまでかけてあやふき瀬々の岩濤

旅ころもをもちりけりなかるい沢うすい峠も雨にしほれて

立けふりそれとも見えす浅間山雲こそかかれさみたれの空

異かたに又行すゑもはし絶てかはなみたかし五月雨の比

ちくま川なかるるいしの音はして水にこり行さみたれの比

古くは東山街道と呼ばれた中山道は、日本橋から京都三条大橋までを結ぶ主要な街道の一つで、信州の険しい山岳地帯を通過するため、とりわけ冬季の雪道は困難を窮めたようだ。東海道のように大河がなく、川留が少なかったことが中山道の利点の一つに挙げられているのだが、あいにく、似雲は折柄の洪水に行路を悩まされた。右の詞書によれば、中山道の全行程を踏破する時間を要してようやく松本にたどり着いたことが知られる。「かるい沢」「うすい峠」「浅間山」と、地名を軸としつつ言葉を寄せた歌々によっても五月雨に難渋した様子は伝わってくるが、上州路を経て信州に入った似雲は増水する千曲川に行路を阻まれた。

千曲川右岸（東岸）の宿駅であった塩名田（現佐久市）には、対岸の御馬寄村との間に橋が架けられていたが、洪水によって流出することしばしば、中山道の最難所<sup>9</sup>であった。この時も「此川（千曲川）にもはしたえければおほくの人心ばかりにて行ことをえず、いたづらに日をかさね侍し」という状況であったが、二十二日、水嵩も減って筏による渡しの再開を待ちわびていた「旅人四五百人ばかり河のほとりにつどひ今や今やと見」ていた。筏とは言うが、似雲が見慣れていた大井川のものとは違って当地のものは、「ほそきはしらのやうなる木を、十文字のかたに打ちがへ、その木のはしに二人づつ、なべての数は八人なりしが、是を肩にしそのうへに人をのせて渡る有さま」であった。まことに危うい渡しの光景であるが、大勢の旅人たちが見つめ

る中、担ぎ手の一人が渦巻く波にさらわれて命を落とした。ちょうど二十歳になる一人子の死を聞いた母は、「あらうらめしのちくま川の水神や、我ひとり子をかへしたまへ、さなくばわれも今身なげて、ともに底のみくづとなるべきぞ」と嘆き悲しむ。周囲の人々がなだめるものの、老女の狂乱は収まることはなかった。似雲は「川波のかけてもしらしその人もひとをわたして身をすてむとは」と、西行歌に特徴的な同語反復の表現を用いた詠歌で若者の死を悼む。さらに続いて

世をうみわたる蜚のしわざよりも、かかる瀬にかかるうきわざは、からきこと  
かなと思ひて、此所をとへば、まことにしほなだといへり

海ならぬこの里をもししほ灘とからき世わたる人やいひけむ  
という一首を献じている。

かろうじて千曲川を渡った似雲は、二十六日、松本に到着するが、「松本の里はづれのはしも、堤くづれてわたるべうもあらず河波をかちより渡りて、出川村にかかる、見れば、軒をならべし人家の中常に行きかよふ道は、此程より今にさながら水あふれて淵となれり」という惨状を呈していた。四囲を山に抱かれた松本の城下は、北東にある三才山の西麓から流出して市街地を流れる女鳥羽川、東部の美ヶ原に源を発して市街地を流れる薄川、南東部にある鉢伏山に源を発する牛伏川、塩尻から流出して東部を北上する田川などの河川が幾筋も交差する地で、市街地には古くから知られている「源智の井」などがあって豊かな地下水を誇るが、水害の記録も数多い。似雲が訪れた享保十六年五月の洪水は、「十日間大雨。女鳥羽川が岡宮上で決壊し東町も本瀬になった。堀も町も一面の泥海になった。大手橋を除き諸橋は残らず落ちた。薄川は小松下で決壊し長沢川も埋橋で決壊し、川南が浸水した<sup>6)</sup>」というものであった。治水がいかに肝要事であったかを知ることができる。

さて、水没して里道を進むことができなかった似雲は、農夫に教えを請いつつ、ようやく「三井何がし」の住む竹淵にたどり着く。「わかにくところをよせ、蹴鞠なぞ好みていとやさしき人」（としなみ草）と評される三井武勝は、「松本在竹淵村陣屋の旗本諏訪老岐守頼尚の家老の子に生まれ、通称郡右衛門といった。初め和歌を領主諏訪頼尚に学び、次いで京都の武者小路実陰に学んだ<sup>7)</sup>」人で、六年前に高野山に登った折りに、似雲をよく知る院主（金剛頂院・湛淵）からその行実を聞いて会うことを切

望していたのであった。この「窓の明ほの」の旅は、実陰門につらなる人を頼っての旅であったが、似雲が筆舌にも尽くし難い辛さを押して松本を訪れたのは、「もし奥州へくだり帰るさに信濃路をとをりなば、かならず立よりねかし、さらば姨捨山の月をとともにゆきて見るべし、此ことわすれずいひつたへてよ」という武勝の懇請に応じたものであった。そして、年来の待ち人に対面を果たした武勝の喜びもまた尋常ではなかった。長途の旅の疲れを労うというよりも、「昼より夜ふくるまで、たがひにかたらひしに、なにとぞいまより中秋の月の比まで、ここもとに錫をとどむべし、さらばさらしな月を見がてらあないしはソべらむと」と、長期の逗留を強引に勧める武勝にたいして、似雲も「その心ももだしがたく、又此度見ずして、かさねて都より思ひ立なんことも身の老ぬることをかへり見れば、げにはかりがたし」と思うのであった。

かくして、似雲の四箇月にもよぶ信州滞在が始まった。その間、武勝、そしてかれの親族、知友の誘いに応じて似雲は、塩尻峠、諏訪湖・大社、御射山、布引山釈尊寺、兎川寺、白糸の湯、浅間の湯、放光寺、王徳寺、更科・姨捨山、善光寺、飯縄原、戸隠、鬼無里、野平・塩嶋・佐野坂、仁科三湖、大町、池田、細野、等々、信州の名所や社寺を精力的に遊覧するが、右に列記した場所のいくつかは、かれが追慕した西行の伝承を有する地であった。その記述については、次節以降で具体的に見ていくことにするが、洪水の記事について『更科紀行』との相違を少し述べておくと、先に掲げた洪水の記事は割愛され、碓氷峠を越えて信州に足を踏み入れた折りの詠として

五月雨の比、浅間の麓を過ると、

立煙それとも見へず浅間山雲にぞかかれ五月雨の比

を掲出するととどまる。そして、千曲川での痛ましい事故にも触れることはなく、

五月雨つづき水まさりければ、竹淵にて、

世々を経てひとつ色成る竹淵の百瀬にかはる五月雨の比<sup>8)</sup>

という、三井邸に到着した折りの一首がつぎに置かれている。似雲が筆舌にも尽くし難いと嘆いた洪水の状況を伝える記述は、『更科紀行』では取り除かれているのである。

## II 布引山釈尊寺参詣

六月七日、似雲は、松本竹淵の三井邸を後にして塩尻へと向かう。塩尻の駅亭で休

息を取り、中山道に入って程ない塩尻峠から東南に広がる眺望を目にした似雲は、

諏訪のうみやこほらぬ波も夏かけてゆきこそ残れふしの面かけ

という一首を詠ずる。諏訪湖は厳冬期に全面結氷することで知られ、膨張と収縮を繰り返すことで氷の表面に亀裂が生じる。その現象は「御神渡し」と呼ばれ、上社の男神が下社の女神に会いに行った跡とも言われるが、西行には「寄氷恋」と題した

春を待つ諏訪の渡りもあるものをいつを限りにすべきつらそ

という一首がある。諏訪湖の御神渡しを引き合いに出しつつ、氷のように冷たい相手を恨むといった趣向が珍しいが、似雲の詠歌は、夏季の氷らぬ諏訪湖を近景にして遙かに望見する雪を戴く富士を捉えたもので、壮大な景を描出した長高い歌である。似雲はここからの眺望が気に入ったのであろうか、再度、塩尻峠を訪れて

めぐり来てすはの海こし見る富士のすかたもおなし塩尻の坂

という一首を詠じている。

さて、おそらく竹淵に戻ることをせず、諏訪湖越しに富士を遠望した後、上諏訪、和田と中山道を東行したのであろう、似雲は布引山釈尊寺に詣でている。

十四日望月をすぎて布引山釈尊寺にまうづ、此ところ回巖たかくそばだちて老樹枝をまじへたり、さし出し大磐石の本に、観音堂を掛つくりにせりここにぬかつけば、谷風ふきあげて夏をよそなるすすしさ立りかたし、此堂より石徑をつづら折にくだれば、西行上人みとせすみ給ひしとて岩屋あり、石もて作れる上人の像を安置せり、この山を布引山といへることは、ちくま川のそなたよりながむれば絶壁にしろき布をひきてさらせるに似たり

たれしかも岩ほにかけてむかしより今もさらせる布引の山

I 節に取り上げた千曲川の渡し場であった塩名田、そして対岸の御馬寄とこの釈尊寺とは直線距離にして一〇kmにも満たない。かりに、信州に到着する以前、似雲が釈尊寺を西行ゆかりの地として知っていたならば、松本に向かう前に立ち寄ることを考えたであろう。険しい和田峠を越えて、再度、千曲川流域に足を伸ばして古刹を訪ねているのは三井武勝たちの強い勧めによるものと推察されるが、『月刈藻集』が初出

とされている「みとせへて折々さらす布引をけふ立初ていつかきてみん」という伝承歌こそ示されていないものの、今西行似雲が「西行上人みとせすみ給ひしとて岩屋あり、石もて作れる上人の像を安置せり」という言辞を書き記していることは注目に値する。『更科紀行』では、詞書として「布引山にて」とあって、右の一首(初句「だれしかと」)を掲出するのみであるが、右の記述には、実際に西行ゆかりの地を訪ねての感慨が込められている。

この布引山釈尊寺の記事を除くと、似雲は信州の西行伝承地を訪ねているのだが、その伝承を書き留めることはしていない。釈尊寺についてみると、享保九年に成った『信府統記』を文献上の初出とする

望月のみまきの駒はさむからじ布引山を北と思へば

への言及は確認することができない。その点からすると、似雲の西行伝承にたいする姿勢がほの見えてくるが、もう少し先を読み進めることにしよう。

### Ⅲ 「西行の墓」のこと

『としなみ草』巻第十三の記述の中でもっとも気にかかる語が「西行の墓」である。松本並柳に西行の墓ありとは、他書に記載の例を知らない。竹淵から白糸の湯へと赴く道すがら、唐突に紹介され、そして、事もなく看過されていく。

廿八日三井氏のいざなひ催しにて、又竹淵村を出で、並柳の山ぞひにたどりゆけば西行の墓あり、神田村あひそめ川をすぎて、はやし村金花山慈眼寺にて、昼の物なソどもてなされあせをぬぐひやすらひて、それより山河を渡り、兎川寺とて観音安置の霊場なソど拝みつつゆきゆきて山辺へつき白糸の名湯にゆあみす

玉の緒もさらにのはへむしら糸のたえぬなかれに湯あみする身は

この「西行の墓」については、秋末氏も関心を抱かれ、踏査を試みられたようだが、場所を特定するには至らなかった。並柳の地籍には、『信府統記』(第二十一 松本領諸寺院記)に「当寺ハ古ヘ西行法師ノ開基ト云ヒ伝フ」と記されている薬王山医眼寺

が存した。「十二坊アリシカ中絶大破ニ及ヒテ今ハ薬師一字慶坊院ト云ヘル坊ノミ残  
レリ寛文年中ニ長久寺ト改メ其後又医眼寺ト号ス<sup>9)</sup>」とあるように、享保年中には慶  
坊院という薬師堂一字となっていたが、その寺域の一角にでも「西行の墓」はあった  
のだろうか。周辺の地形やら、墓の形状などを書き置いてくれていればと思うが、「並  
柳の山ぞひ」という表現に従えば、中山丘陵から広がって、その北端に位置する弘法  
山古墳までの丘陵部が比定地となる。

似雲と言えば河内国弘川寺に西行の墳墓を見出した人として著名である。『としな  
み草』巻第十六に収める「西行上人古墳記」は夙に知られているところであるが、  
「はじめに」でも記したように、巻第十三の巻末にも同様の記事が収載されている。

普門品をみそちあまり三まき此一まきにかきつめて、石山寺に納め奉るは、西  
行上人の旧跡くにぐににおほかれど、身まかり給ひし所さだかならず、いか  
にもして尋問えまほしく、年比思ひすぐしつるに、或人のいひけるは、上人終焉  
の地は、河内国石川郡弘川寺と、古き文にも見え侍れば、いにし比ゆきてたづ  
ねつれど所にもしれる人なくいたづらに帰りさふらひき、もし志ありなば、す  
ぎやうにことよせて、彼あたりここかしこ日をかさねつつ、心をつくして求め  
なば尋うべしと有しかば、げにしか志はあれど、しぞきておもひめぐらせば是  
凡慮をもてはかりしるべきことにしもあらざりければさりし比ここにまうで来  
て恐みながら

石山やかたきところにいのりなはなにかねかひのかなはさるへき

享保十七年二月、多年の宿願を果たすべく石山寺に参籠した似雲であったが、「昼  
夜不臥七日七夜、丹誠を尽して祈願」した結果、「笠」に「五位鷲」が舞い降りると  
いう靈夢を得た。漢字を解体すると「五人路二立、鳥竹二立」意になることを感得し  
た似雲は、弘川寺の寺域で西行の墳墓を見出すというものである。似雲が並柳で西行  
の墓をながめたのはその七箇月あまり前のことになるが、これも、信ずるに値しない  
「西行上人の旧跡」と捉えたのであろうか。それにしても、似雲がまったく反応を示  
していないことは残念である。



#### IV 更科・姨捨山での観月

姨捨山の仲秋の名月を愛でること、それこそ似雲が信州滞在中に一番の目的としたことであった。八月十四日の早朝、三井武勝、荻原茂綱とともに姨捨山の月をながめる旅に立ったが、この姨捨山行については、竹淵を旅立つところに始まって記事が多いこと、そして、似雲の歌のみならず他人詠も多く含むことから、『更科紀行』との違いに絞って要点を指摘していこう。

まず道中の記事から一つ。松本から会田宿を過ぎて立峠にさしかかる。『としなみ草』では、

刈谷原の峠反町会田の里をすぎ多地峠にかかる麓に、無量寺といへる禪院のかたはらに、木立見るにあかざりし老樹の松あり、乱橋中の峠法橋といふ所を行て、青柳の駅に宿す、十五日明方にたちて切をとをしをとをり、砂原といふ所に農家朝霧のひまより見えければ

霧こめし稲葉の雲のたえ間よりみゆるわら屋の二つ三つ四つ

と、善光寺道の地名をたどりつつ風光を叙するにとどまるが、『更科紀行』のほうは、たち峠此辺風越の峯あるよし、所の人申にぞ。折ふし風吹て曙もわすれければ、  
ここも又その名はしるく吹払ふそれかあらぬか風越の峯 武清  
という歌文を載せている。「風越山(峯)」は飯田市西部の歌枕として知られているが、『信府統記』にはほかに二箇所を挙げていて、右は「筑摩郡会田与乱橋村より辰巳の方原山村へ越る山路なり」と記されている場所である。

風越の嶺のつづきに咲く花はいつさかりともなくや散るらん

という西行歌(山家集・八三)は、歌枕詠とすることはためられるが、「風越山」の例歌として引かれることが多い。「ここも又」の作者、武清なる人の名は『としなみ草』に見出せないことからすると、この箇所は後に補入されたとも考えられるが、道中、右の西行の歌などが話題にのぼることはなかったのだろうか。

つぎに、姨捨山の寺、すなわち、姨捨山満月殿放光院長楽寺に到着しての記事に目を転ずると、大きな違いが鮮明になる。『としなみ草』では、

(詞書、略)

武勝

誘ひ来て今宵の月を都人なくさみやするさらしなの里

かへし

(似雲)

更科やこよひの月になくさみつなれし都の空もわすれて

という二人の贈答にはじまり、似雲をはじめとする六名の奉納歌を列記、そして「田毎の月」詠と、スムーズな配列がなされているのにたいして、『更科紀行』は、「姨捨山十三景」の紹介などに続いて「古歌四十首奉納有。左の如し」として四〇首もの古歌を掲出している。すなわち、名所歌枕としての説明と証左とが付加されているのであるが、これは似雲の詠草をもととしながら、『更科紀行』という一書を仕上げるための措置であったと考えられる。武勝邸滞在中、姨捨山行がなされて一月も経たない時に、似雲が『更科紀行』跋文を草していることからすれば、早くより編輯の構想が立てられていたものと推測される。

さて、古歌四〇首の中には

あらはさぬわが心をぞうらむべき月やはうときおぼすての山

という西行歌（西行法師家集・五四二、御裳濯河歌合、新勅撰集）が含まれている。

また、別の箇所には「所の人申侍りしは、むかし西行法師の歌に」として

雪あらばふじとやいはん信のなるをば捨山をかぶりきが獄<sup>99</sup>

という伝承歌を掲出しているのだが、『としなみ草』にはそれらにかんする言及がまったく見られない。

武勝が似雲の行状を聞き知って強く会うことを望んだのは、六年前に高野山に登った折りのことであった。似雲のことをよく知る院主に託した言伝は「もし奥州へくだり帰るさに信濃路をとをりなば、かならず立よりねかし、さらば姨捨山の月をともにゆきて見るべし」というもので、武勝にとって似雲を伴っての姨捨山行はそのときから願ひ続けていたことで、遠来の客人を満足させるために、わが郷土の名所歌枕の来歴故事についても予習怠りなかったはずである。そのことは『更科紀行』を通覧すれば明らかであるが、一方、『としなみ草』を閲するかぎり、姨捨山行の記事中に「西行」という語は見出せない。似雲は自身の目で初見の歌枕を見、自身の感慨を詠んでおり、西行という存在を意識していなかったかに見える。

更科・姨捨山の月を堪能した一行は、善光寺に詣でた後、秋色鮮やかな飯縄原を横切って戸隠の各院を詣でている。さらに、善光寺古道に歩を進め、鬼無里を過ぎて野

平峠（柄沢峠か）を日没の後に越えて白馬の野平に出ている。この野平峠越えは、各地を経めぐって旅慣れた似雲と言えども困難をきわめた険路であったようで、『としなみ草』の記述は長大、かつ、読み応えのあるものとなっている。そして、野平→塩嶋→佐野(坂)→青木湖、中綱湖、海ノ口の湖水（木崎湖）→大町→池田→（高瀬川）細野→穂高と、いう経路をとって松本竹淵に帰着するのだが、戸隠、佐野、そして、細野<sup>99</sup>といった西行伝承を有する土地に立ち寄るものの、『としなみ草』、『更科紀行』ともに西行伝承に言及する記述は見出せない。享保十六年当時においてははまだ生成されていなかったのか、その事情は詳らかにし得ない。

## おわりに

『としなみ草』巻第十三に収める似雲の四箇月に及ぶ信州滞在記を西行伝承とのかかわりにおいて読み進める作業をおこなってみた。「今西行」と呼ばれたほどの人であるからには、西行という言葉に敏感に反応し、情報の集積に努めたであろうという予想は見事に覆されることとなった。布引山釈尊寺においては「みとせへて」という西行伝承歌を念頭に浮かべながら西行の事蹟に思いを馳せる似雲であったが、姨捨山、そして、戸隠、白馬と、一九世紀には書承としても定着していた西行伝承の保有地を訪ねながら、その伝承について言及することはなかった。姨捨山にかんして『更科紀行』の記述との相違を指摘しながら述べたように、西行にかかわる口碑伝説は存した。そして、武勝たちがその伝承を似雲に語ったであろう事も疑いがないところであったが、似雲はそのことを書き残すことはしなかった。実際に各地を歩いていくうちに「西行上人の旧跡くにぐににおほ」いことに辟易して書き残そうとしなかったのだろうか。

似雲にとっての西行は、あくまでも和歌の西行であって、土地の人々に愛され、生き続ける伝承の西行には関心を抱かなかったのであろうか。似雲は、西行の行状をそのままに実践する人であって、西行伝承を保持することには関心を抱かなかったかと思われる。西行同様、似雲も語られる人であったようで、それが「今西行」と言われた所以であるのだろう。

似雲という人を軸とした場合、訪れた土地の人々とどのような交流がなされたのか、

そして、たとえば、朝倉尚「似雲法師と巖島―『としなみ草』と『巖島八景』―<sup>12)</sup>」に論究されているように、似雲の足跡がその土地の文化にどのような影響を及ぼしたかなど、考究すべきことは多い。一方、似雲を招じ入れ、土地の名所や寺社・温泉を懇ろに案内した三井武勝のような人たち、中央の文化に通じた地方の文化人の事蹟について、能う限りその実態を把握する必要があるだろう。いずれも今後の課題として、ひとまず、稿を閉じることとする。

### 【注】

- (1)『としなみ草』の引用は、弘川寺・土橋真吉共編『似雲法師 としなみ草』(全国書房、昭和18)による。漢字は通行の字体に改めたが、表記に誤りがあると思われる箇所も存するが、対校する煩を避けて同書のままとした。
- (2)引用は、岩波文庫『近世畸人伝』による。
- (3)『信濃』第29巻2号(昭和52・2)
- (4)信濃毎日新聞社、昭59。『更科紀行』の引用は同書による。
- (5)角川日本地名大辞典『20 長野県』(角川書店、1990)、「塩名田」の項、参照。
- (6)『松本市史』第二巻・Ⅱ、三七四頁、表82「城下町の水害年表」による。
- (7)『長野県歴史人物大辞典』(郷土出版社、1989)
- (8)『としなみ草』では、初二句「白川や一つなかれの」とある。
- (9)新編信濃史料叢書・第六巻(信濃史料刊行会、昭和48年)による。
- (10)『善光寺道名所図会』では、口碑として「雪ならぬふしとやいはん信濃なる姨捨近き冠着か岳」を掲げる。
- (11)細野を通りかかった折りの詠として『としなみ草』は、

池田をすぎ高瀬川のはしをわたり、細野むらにかかる 武勝  
ふる雨に水はまさりて高瀬川心ほそののはしをふみみし  
似雲  
分ゆけは千種の花も乱れあひて道もほそのの秋の露けさ  
茂綱  
色かへし木々の梢に哀しるこころほそのの里の秋かせ

の三首を掲げる。似雲歌を除いた二首の「心ほそのの」という地名に絡めた措辞は、

信濃なる有明山を西に見て心ほそのの道をゆくなり

という西行伝承歌との関連において注意される。

(12) 広島大学「日本研究」特集号2、2003・4。